

唐丹文芸

「やちべむ」詠草

唐丹短歌会

夫逝きて七度迎える祥月を四月となして忌をとむらいぬ
逝きし人等吾にあずけし一里塚負いて旅行く幾可の道や

遥かなる路をたどりて今迎う米寿の吾の生きるよろこび
郭公の啼く日の朝は霧の濃く海山覆って吹く風もなし

一夏を丈余に伸びし藤蔓が残る命を冊にたくせる
年老いし兄の容態気づかいつ食欲なきをすすめる辛さ

血肉よりしほる涙の小○旗平成びとのしるべとなりぬ
累々ときり立つ岩の矢越岬きはむく波も海のアルプス

病院に手をつなぎ歩む老夫婦にいたわり生きる姿を見たり
医師の着る白衣と窓辺のプリムラの朱の対照のいたく明るし

朝毎に詣るわれにぞ変りなき笑顔の夫よ守り賜えと
七夕の笹に結びし短冊に杖を力に明るく生きる

八十路人生はるか想ひは昨今四季の巡りになほも鮮やか
連れ立ちて仲間とオムツ畳む背に耳をすませば初夏の森林風

マラソンを好みたる夫わが前を駆け抜けるがに逝きて帰らず
「ただいま」とひよいと戻って来るやうで急死の夫を待ちて百にち

須具 美佐子

川原 セイ

大津 秀子

磯崎 彬

上野 ウタ子

環 あき

中嶋 多喜子

高橋 昌子



曹洞宗岩手県宗務所
テレホン法話
 ☎ 0120-62-1602

心に残る
 法話を
 お聞き
 下さい